



第1章

まちの輝きを生む人たち

広くなった内子町。それぞれの地域に、歴史や文化に彩られた豊かな個性があります。そして、その場所で自分らしく輝きながら生き生きと暮らしている人々がいます。キラリと光る内子町、その輝きの発信源を訪ねて——。

元気な農業、元気な地域づくり

おいしい食べ物と豊かな自然。農業は人が集まる舞台。地域資源を生かし、交流を通じて、地域を輝かせる

山に囲まれた小さな盆地にある内子町。肥沃な土壌と豊かな水、朝晩の寒暖の差を生かして、さまざまな果樹の栽培が盛んに行われています。

大程久壽男さんもそんな果樹農家の一人。緑深い程内地区の山腹で、妻の幸子さん、長男の寿博さん・奈々絵さん夫妻と共に、主にブドウと柿を生産しています。

「一番大切なのは、消費者を裏切らない生産者であること」と語る久壽男さん。土壌分析や特別栽培認証制度などにも率先して取り組んできました。現在は農協や内子フレッシュパークからりへの出荷のほか、宅配での直接販売も実施。毎年収穫の時期が近づくと、丹精込めて育てた果物を心待ちにしている全国の人たちから注文が届き、「うちの果物を食べた人から直に反応が返ってくるのがうれし

い」と言います。

久壽男さんと幸子さんは、昭和61年に旧内子町で始まった知的農村塾の当初からの塾生。もつとステキな生活ははじめませんか。のキャッチフレーズに引かれて入塾し、夫婦そろって毎回参加しながら、農村で心身共に豊かに生きる知識や知恵を学んだそうです。また、「女性に優しい内子農業を目指して」をテーマに、農家の女性たちが生き生きと輝く生き方についても考えてきました。

平成3年、旧内子町初の議会推薦で女性農業委員が誕生。その後、平成9年から16年まで幸子さんが同委員を務め、委員会だよりの発行、農地パトロール、研修会の実施など、さまざまな活動に取り組みました。その中で「先輩の応援、夫をはじめ家族の協力、女性仲間や地域の励ましがあつたからこそでき

た」と語る幸子さん。「背伸びをせず、肩を張らず、周りの人たちと一緒にあって、自分にできることから始めることの大切さを実感した」と言います。

平成12年からは、県の高齢者活動促進事業がきっかけとなって地域でそば作りが始まりました。その後、こんにやく芋も栽培されるようになり、地域の女性たちと一緒に「程内こんにやく芋グループ」を結成。小学生の体験学習や町内外の団体・個人などを受け入れ、こんにやく作り体験を提供しています。近年は口コミで評判が広まり、体験の申込が増加。「来てくれた人の、ありがたう」の言葉や笑顔に、みんな元気をもらっている」とうれしそうに話します。

家族、そして地域の人々と一緒に農村の暮らしを楽しむ



大程久壽男さん(下段右)、幸子さん(同左)
寿博さん(上段右)、奈々絵さん(同左) =程内=

プロフィール

農業一筋、「生涯現役」と語る久壽男さん。幸子さんはそんな久壽男さんの元に嫁いで30年余り。寿博さんは農業を継ぐ前「若い間だけ好きなことをやりたい」と長距離トラックを運転していた。松山市出身の奈々絵さんは元・出版社勤務。個性豊かで笑顔が絶えない、仲良し家族



㊦内子町の特産品である柿。毎年秋には、内子中学校の生徒たちが訪れ、柿の収穫作業を体験している ㊦時には外国人も訪れるこんにやく作り体験

農村の暮らしを 楽しむ達人

好奇心と行動力を失わない
楽しいことは自分で創り出す

また「おもしろそうなことは何でもやってみたくなる」と言う企業さん。平成19年11月に町がどぶろく特区認定されたのを機に、企業組合を設立し本格的などぶろく製造も始めました。「喜んでもらえることが一番うれしい」と話す二人。笑顔に元気をもらって、ますます農園生活を楽しんでいきます。

立山地区の山の中、りんご園の隣に建つ丸太作りのログハウス。山本企業さん・陽子さん夫妻はここでグリーンツーリズムの宿を営んでいます。ログハウスは企業さんの手作り。5年余りかけてほぼ一人で建てました。その後、「来てくれた人に楽しんでほしい」と、再び手作りで庭先に大きな石窯を設置。採れたて野菜をふんだんに使ったピザやアップルパイ作りは、家族連れなどに大人気となっています。



④石窯で焼くピザは「宅配よりおいしい」と都会の子にも好評 ⑤20年11月、内子産どぶろくを発売



山本 企業さん・陽子さん Ⅱ下立山Ⅱ
プロフィール
23歳で地元に戻り、乳牛の飼育やりんご栽培を始めたという企業さん。公務員だった陽子さんは「退職してものんびりしている暇がない」と笑う

小田深山から魅力を発信

頑張っていれば、人が人を呼んでくれる
小田深山を舞台に交流の和を広げたい

天野 博美さん =立石=

プロフィール

卒業後、保育士として勤務。結婚後は設計士であるご主人の仕事を手伝う。男ばかりの兄弟に囲まれて育ち、「男っぽい性格」とのこと。「思いついたら即実行」と、いつも新しいことにチャレンジしている



四季を通じ美しい風景が広がる小田深山渓谷。天野博美さんは、そこで「深山荘」を営んでいます。元は旧小田町の運営だった深山荘。委託の話を持ちかけられたときは、「この渓谷が庭になると思ったら、すぐに心が決まった」と言います。ご主人の協力もあり、溪流釣り大会の開催、子どもたちの自然体験の受け入れ、グリーンツーリズムや山並み保全活動など、さまざまな取り組みを展開中です。昨年からは県の婚活支援事業にも参加。また愛媛県更生保護会(通称・雄郡寮)の委託を受け、入寮者に毎日の食事を提供しています。さらに、今年度は深山荘で、町内の小学生合同の自然体験合宿も行われる予定。「たくさんの出合いを大切にしながら、一人でも多くの人にこの小田深山の魅力を伝えていきたい」と張り切っています。



⑥深山荘では学校合宿も受け入れている。子どもたちが採った山菜は天ぷらに ⑦毎年人気の溪流釣り大会

上岡 満榮さん =北浦=

プロフィール

棚田の一番奥に建つ家に暮らす上岡さん。一番大変なのは、日々の水の管理と石垣の草引きとのこと。「人工林が増えたせいか、昔に比べると水がなくなった」と話すが、それでも谷の水が枯れることはない。共に農業を営む奥さんの淳恵さんは「若い人が大勢来てくれるから年を取ってる間がない」とか。



美しい棚田をいつまでも

3軒の農家が守る棚田 オーナーとの交流で地域を活気付ける

大洲市河辺町との境に位置する泉谷地区。標高470mの狭い山間の急斜面に大小さまざまな95枚の田んぼが並び、平成11年には農林水産省から「日本の棚田百選」に選ばれました。

近年、棚田は米を生産する場としてだけでなく、保水や山間部の地滑り防止、生態系保全など、多くの機能に注目が集まっています。また、弥生時代から続く水稲耕作の歴史によって形成された水田風景は、日本の文化的原風景ともいわれ、わたしたちに安らぎを与えてくれる空間でもあります。しかし、農村部の過疎化や高齢化の進行などから、その継続が困難になって

いるのが現状です。そのような中で、「大切に守られてきた美しい棚田を、次の世代にも引き継いでいこう」と、上岡満榮さんたち同地区の住民

が中心となって「泉谷地区棚田を守る会」を設立。小学生や幼稚園児の農作業体験、自然浴ツアーの開催など、さまざまな取り組みを行ってきました。また現在は、地元の御祓自治会などとも協力しながら活動を進めています。

平成16年からは「棚田オーナー制度」を導入。県内外から15組が参加し、時期に応じて田おこしや田植え、稲刈りなどの農作業を手伝っています。オーナーの皆さんの評判も上々で、「棚田米は本場においしい。その上、自分たちも一緒に育てたと思うと、おいしさが倍増する」とのこと。

上岡さんは「オーナー制度を始めたからといって、普段の農作業が楽になるわけではない」と話します。手作業でしかできない石垣の草引き、あぜ塗り、

田植え後の水の管理など、地元の人たちが毎日行っている作業の負担は大変なもの。「でも、昔は郵便配達の人くらいしか来ることにはなかった。今は大勢が来てくれるようになって、この棚田のファンになってくれる。交流を通じて地域にも活気が出たし、田んぼをきれいにしようという意識も高まった」と活動の手応えを感じています。

平成17年からは、地元住民などの寄付を受け、棚田周辺に毎年100本のシャクナゲを植栽。将来はシャクナゲまつりなどの開催も計画しています。また近年は移住者の受け入れにも積極的に取り組み始めました。「このままでは地域の後継者がいなくなってしまう。今のうちに行えることは何でもやっておきたい」。穏やかな上岡さんの力強い言葉が印象的です。



⑥オーナー全員が参加しての稲刈り作業。収穫を楽しみに作業もはかどる ⑦毎年開かれる「自然浴ツアー」。景色を眺めながら食べる棚田米のおにぎりは大人気

中谷 ^{のぶひろ}信弘さん(上段左)、^{たかこ}隆子さん(同右)
^{りゅうすけ}竜介さん(下段左)、^{てんぺい}天平さん(同右) =長田=

プロフィール

信弘さんは現在、自治会の運営委員や民生委員を務める。隆子さんは移住者の良き相談役。竜介さんはストリートダンス、天平さんは演劇と、それぞれ地域で活躍中



自然に囲まれた環境で、農業を営む暮らし
 都会から移住を望む人と地域との架け橋に



④いつも仲良く農作業を行う信弘さんと隆子さん ⑤都会からの就農希望者に農作業を体験する機会を提供

20年前に大阪から双海町(現伊予市)へ移住し、その後、長田地区へ移り住んだ中谷信弘さん一家。きっかけは愛媛県内で自然農法を実践していた福岡正信^{のぶ}さんの著書『わら一本の革命』との出会いでした。耕さない、除草しない、肥料や農薬を使わない。自然と共に生きることへのあこがれから始めた農ある暮らし。しかし、「当初は農法の違いなどもあり、農地を借りることも難しかった」と言います。

そんな自身の経験から、就農希望者を対象に自宅で体験学校を開き、県の移住サポーターとしても活動するなど、「移住を望む人がすんなり地域に入れる環境づくり」に力を入れている中谷さん。同地区をはじめ山間部の人口減少が進む中で、「地域の活性化のためにも、移住の支援は自分のライフワーク」と語る頼もしい存在です。

5月5日、豊秋河原の上空に1,000統を超える凧が舞い上がります。400年以上の歴史を誇る「いかざき大凧合戦」。奥島重利さんは、長年その凧の製作に携わっています。

「五十崎の凧は日本一」と言う奥島さん。「若い時は全国の凧上げ大会に出場して、どこでも一等賞をとったもんだよ」と誇らしげに語ります。55歳の時に地元有志18人で「凧の会」を設立。愛媛県で開かれた「第1回国民文化祭」では、仲間と共に30畳の大凧揚げを見事に成功させ、名声を一層高めました。

残念ながらその後、同会は解散。しかし数人の会員が、現在も凧作りを行っています。そして奥島さん自身も、製作の傍ら子どもたちに凧作りを指導するなど、「伝統の凧をより良いものにして次の世代に伝えたい」と伝承の努力を続けています。



⑥5月5日、大空に奥島さんが作った出世凧が舞い上がる ⑦今では書ける人も少なくなった凧文字

奥島 ^{しげとし}重利さん =上町=

プロフィール

小学2年生のとき、お父さんがナイフを買ってくれたことがうれしくて、いろいろなものを手作りしていた。昔から手先の仕事は好きだったそう。「もう歳じゃけんなあ」と言いながら、80歳を迎えた今も、年に約1,000統の凧を作る



地域に残る
 凧文化を伝える

伝統の凧を次の世代に
 自分が持つ技術は進んで分け与えたい

明日のエコでは遅すぎる。具体的な行動を、今。

高本 師津雄さん =寺成=

プロフィール

NPO法人ODAの木協会代表。小田深山の大自然を舞台に「共に学ぶ」をモットーとして、楽しみながら学ぶ活動を展開。人と生き物すべての出会いの中から、一つの生き物として何ができ、何をすべきかを真摯に考える。天気の良い日は、ほぼ毎日山に登っているという健脚の持ち主



森と共に生きよう

山の健康は環境保全の基本

内子町の山を、どう守り、どう活用していくかが重要

「町並みから村並み、そして山並みへ」をキャッチフレーズに掲げまちづくりを進める内子町。その山並みのシンボルとなっているのが小田深山です。

小田深山は雨乞山、笠取山、大川嶺など、四国山地の標高1,200〜1,300級の山々に囲まれています。また四季折々に美しい顔を見せる深い渓谷は、多様な生態系を育む、貴重な自然の宝庫です。高本師津雄さんは、その小田深山を主なフィールドとして、森を守る活動に取り組んでいます。

高本さんの活動の母体となっているのはNPO法人「ODAの木協会」です。もともとは平成5年、旧小田町の地域おこし人材育成プロジェクトとしてスタートし、9年に任意団体として同協会を発足。その後、16年にNPO法人を取得しました。

高本さんは環境教育事業部長として当初から参加。廃校となった小田深山小中学校校舎を活用して環境教育スクール「ODAの木自然学校」を開き、夏休み長期自然体験村をはじめ、小田深山の四季を生かした自然教室・クラフト講座、人材育成（森の案内人養成講座）、出張フォレストスクールなどの活動を行っています。

また近年、林業の不振などから手入れの行き届かない放置林が増え、大雨による鉄砲水や土砂流出などの災害が心配される中、「環境政策の面から山を見直すことが必要」と訴え、放置林の手入れと自然林の再生を目指して、個人でも兼業でも取り組める自伐林家の育成にも力を入れていきます。

「森が水を蓄え、水に栄養を与えて、川から海へと流れる。

山が健康で豊かであれば、川も海も健康で豊かになる。基本は山の保全」と考える高本さん。「山の保全は、関わろうと思えば誰にでもできること。人ごとだと思わず、自ら関心を持って山と身近になってほしい」と語ります。

内子町が21年度から本格的に取り組んでいる、小田深山を中心とした山の保全と活用を進めるための「せんの森プロジェクト」でも、指導者の存在として活動を牽引している高本さん。「明日のエコでは遅すぎる。内子町の森を守るためにどうすればいいのか、内子町ならではの森づくり、山づくりを、みんなで作っていきましょう」と呼びかけながら、強い信念を持って、自ら山と関わり続けています。



④ 溪谷の石を顔に見立て、自然アートを創作。大人も童心に戻る ⑤ 小田深山の奥に広がるブナ林を散策しながら自然観察。「森の案内人」として活動する高本さん